
私は何もできません

はいじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は何もできません

【Nコード】

N3222Y

【作者名】

はいじ

【あらすじ】

突然魔王代理のため召喚させられた、特殊能力等皆無の一般人が
途方に暮れる話。

1 話目

目の前で腹痛に苦しむ男は右手に持っている黒い布をこちらに突き付けてきた。

その布に対してどう対処していいのか困る私。

埒が明かないので一応受け取った。

そして目の前の男は自身の左手で腹部を押さえ続けながら「おおお」と低く唸る。

「とりあえず排泄に行つてはとうですか？」

「いや……そういう痛みとは違う」

「……生理？」

「……私は男だ」

そしてまた苦しみだす目の前の男。

「陛下……、横におなりください。説明は私が致しますゆえ」

腹痛に苦しむ男の傍に控えていた長身の男が声を放った。

長身の男に介助されながら、部屋の奥のほうへと連れて行かれた腹痛に苦しむ男。

しばらくして長身の男は私が立っている場所まで戻ってきた。

「お嬢さん、聞きたいことはたくさんあると思うが事態は一刻を争う状況なので今は割愛させてほしい」

「え……はい」

長身の男の鬼気迫る表情に出かけた言葉は引っ込んだ。

「今この城に勇者一行が攻め込んできている」

「ちよっと待て」

勇者だと。

「偵察部隊の情報によると勇者たちはほとんど瀕死状態だそうだが、この部屋の目と鼻の先ほどの距離に居る」

「いやだからちよっと待ってって」

勇者って。

「勇者たち人間に魔王陛下のあのような姿を曝すなど言語道断」

「だからさちよっと待て」

魔王だと。

「しかしこの部屋に魔法陛下が居ないと格好がつかないためあなたに代理を務めていただく」

「いや本当にちょっと待て」

ラスボスの代理だと。

「こちらも困っているのです、いいからそれを羽織ってください、早く」

怒鳴る長身の男に、くしゃくしゃに丸められていたそれは広げる。

「早くそのマントを羽織ってください」

私は言われるがままマントを羽織った。

存外にでかい。

手も足も出ないとはこの事が。

そして羽織った襟首のところをぐっと引っ張りあげ、フードのように私の頭部全体を覆った。

「一応顔を隠させてもらいます。……あの、これから何が」

長身の男はこの部屋にある唯一の扉へ一歩進む。

「あなたはそこに居てください」

外の方から足音がどんどん近づいていた。

「質問の二つくらい言わせてください」

足音は扉のすぐそばで止まった。

「これが終わりましたらなんでもお尋ねください、お答えしますから」

長身の男は扉から視線を動かさことなくそう告げた。

扉が開く。

「覚悟しろ、魔王」

勢いよく飛び込んできた4人の人間。

衣服は砂と土と血液により廃れ、目は血走るように充血している。

息も上がっており、一目で激戦を繰り広げてきたとわかる。

つまり4人とも、すでにぼろぼろの状態。

「勇者一行、よくここまで来たものだ。誉めてやろう」

長身の男がいきなり芝居がかったようにセリフを吐いた。

「なんだてめえ」

4人の内の一人、明らかにパワータイプを生業としている半裸男が食って掛かってきた。

「私はこちらにおわす御方に御仕えしております」

長身の男が勇者一行に私を紹介した。

反射的に軽く会釈をしてしまったためとんでもない眼光で貫かれた。
心なしか胃が痛い。

「ってことはその黒いマント野郎が魔王か」

大剣の切っ先をこちらに向けて威勢よく叫ぶ青年。

統合的に彼がリーダーなんだろう。

「貴様、陛下に向かってなんと畏れ多い、今すぐそれをやめろ」

長身の男は自身がぶら下げている細身の剣を鞘から抜くと大剣を所持している男へ向かっていった。

半裸男が盾になるようにその間に身を投げ、一瞬にして斬り捨てられた。

それと同時に半裸男の体は消えた。

…何が起きた。

私同様に、勇者一行も目を見開いている。

「失礼、この剣は少々特殊でして斬ったものを消し去る力があります。先ほどのように真っ二つに斬ってしまえば御覧のように全てを消し去ります」

まるでマジックを見ている感覚だ。

私は思わず拍手を送った。

すると長身の男は気を良くしたのか、さらに続けた。

「例えばこのように…」

長身の男は、勇者一行の一人に一瞬で近づき、その女性の手首から先を斬った。

「使い手の意志により部分削除も可能となります」

女性の手首から先はなくなった。

行き先を無くした血液は止まらない。

そして切り取られた女性が叫び声を上げるため口を開いた瞬間、その女性の姿は消えていた。

「……ミ、ミレーユ……」

「そんな……、ガレンドに続いてミレーユまで……」

後ろに控えていたもう一人の女性はその場に座り込むように崩れ落ちた。

大剣を抱えていた青年は眼光を一層鋭くさせて長身の男に向かっていった。

しかし長身の男はまたも一瞬にして座り込んでいる女性に近づき、斬った。

「レナ！」

ただ一人残された勇者、大剣を握り直し長身の男に向かっていくかと思いきや私の方へと体を向けて突っ込んできた。

うそだろ！

私は何もできない。

そもそもこんな現実離れしたような状況で、現実離れした人物たちの繰り広げる一部始終をただテレビを見るかのように見ていた私。

そんな私に何ができる。

何もできない。

しかし危険は次の瞬間に迫っている。

長身の男がこちらにかけてくるのが見えた。

だが彼が私のもとへ来る前に、勇者の剣が私に到達した。

マントに剣の切っ先が触れた。

瞬間、私を覆っていたマントが勇者を覆い尽くすように襲い掛かった。

マントの面積が明らかに規格外の量となっている。

どンドンあふれる布に溺れる勇者。

「な……に……」

勇者が放った最後の言葉。

その答えを知りたいのは私である。

そして勇者の姿は消えた。

勇者の姿がなくなるとマントは何事もなかったかのように元の大きさに戻った。

私はあわてて生地をひっくり返すが何の異変もない。

「大丈夫のようですね」

長身の男が安堵の表情を浮かべていた。

「説明を……」

してください、頼むから。

2 話目

長身の男に説明を求めると、とりあえず座りましよう部屋の内へと案内された。

そこには未だに腹痛に苛まれる男が長椅子に横たわり悶え苦しんでいた。

私と長身の男はその長椅子の近くにある一人掛けの椅子にそれぞれ腰を掛けた。

「さあ、どうぞ。まずあなたの質問に全てお答えいたしましょう」

ゆっくりとした口調で長身の男は私を促した。

「えー、ではまずあなた達は何者ですか？」

「私たちですか？ではまずそちらにおわす方ですが、この国を治める王、魔王陛下でございます。そして私は宰相として仕えさせて頂いております、サージェス・ゲオルグと申します」

「はい。……ちょっと待つてくださいね」

色々を受け入れるために心の準備をさせて下さい。

数十秒ほどして、私は口を開いた。

「それで、その、私は何でここに居るんですか？」

「それは、陛下が召喚したからです。魔王代理として」

「あー。……ちょっと待ってくださいね」

代理って、何？魔王の代理って何？

課長代理とかの代理？旅行代理店とかの代理？

「何故私だったのですか？」

「それは、私ではお答えしかねますので……」

宰相の視線が横たわる魔王へと移され、私も追うように横たわる魔王陛下へと視線を移した。

それにしても、改めて見たが魔王陛下は人間離れた形容をしていた。

全体的に紫色なのはやはり見間違いではなかったという現実。

頭髪が濃紫、瞳は白目がほぼ無い紫の眼球、身に着けている物もほぼ紫色に統一されている。

人間ではないのが一目瞭然。

そしてこの宰相も何処か人間離れしている。

身長が2m近くある程の長身で全体的に色素が薄い。

しかし魔王陛下に比べれば人間に近い形容。

「何故君を召喚したか……」

魔王が口を開いた。

「それは私との波長が合致したからだ」

合致？……波長？

意味が分からず更に尋ねようとするも魔王は次なる腹痛の波に襲われだし会話の続行は不可となった。

「召喚魔法とは莫大な魔力を必要とする魔法で、誰彼かまわず召喚できるという訳では御座いません。性質が似通った者しか呼ぶことが出来ないのです」

「ちょっと、あの。え？……え？ちょっと待ってくださいね」

私が魔王と本質的に似ていると？

私はこんなに紫ではないのに。

「何故召喚しなければならなかったのですか？誰か別の人に代理を任せればよかったですのでは？」

「この国では例えどんな理由があっても魔王陛下以外が魔王を名乗ることを禁止としています。それは幼少期より叩き込まれてくることなので誰一人として魔王を名乗り成り代わることが出来ないのです」

だから波長が合い、この国もといこの世界の住民ではない私が引張ってこられたということか。

「それから、このマントは何ですか？勇者食べてましたけどマントの裾を掴み説明を求めた。」

「そのマントは代々の魔王陛下に受け継がれてきた、いわば魔王の証です。そのマントは魔王以外が身に纏う事が出来ないようになっており、さらにそのマントの委譲方法は直接手渡しのみとなっております」

私はその魔王しか纏えないマントを現魔王から直接手渡しで受け取った。

私はそのマントを脱ぎ、綺麗に畳み始めた。

その間も宰相のマント講義は続いていた。

「そのマントはありとあらゆる外敵から魔王を守ります。といても守り方は様々です。憶測ですが身に着けた魔王陛下それぞれの性質に合わせて変質しているものと考えられます」

「そうなんですか？」

思わずマントを畳む手が止まった。

常に人食いマントでは無いと？

「ええ。そもそも今回のように攻撃的なマントの動きは今までの記

録上、御座いません。そもそも歴代の魔王陛下はマントに守つてもらうほど弱い存在では御座いませんのでマントが力を発揮する機会など長い歴史の中ではほんの数回程度です。しかしその数回全てが防御の記録です」

それは、つまりあれか。私の戦闘能力がゼロだからマントが全力で攻撃に徹するとかそういう事か。

攻撃が最大の防御って言う、いわゆるそれか。

「とりあえず、勇者一行も退けましたし、私、そろそろお暇したいのですが……」

マントを綺麗に畳み、いつでも返却できるようにした。

「こちらとしても、そうして差し上げたいのは山々なのですが……」

「…なんですか？」

「召喚魔法は大変魔力を必要とする魔法でして、その、…それを行使できる力を持つ方がこちらの魔王陛下のみでして」

「うっそ」

「いえ、事実です。それで、陛下は現在謎の腹痛に苛まれ、満足に魔法を行使できる状態では御座いません」

「いやいや、だって私を呼んだじゃないですか」

「あれは無理に私が頼み込んで最後の魔力を出し切ってお呼びして

頂いたものですので、……何といいますか今の陛下は魔力が一切抜けきった状態なのです」

「……え、今魔王魔力無いのですか？」

「御座いません」

「え、じゃあ私、帰れないのですか？」

「誠に申し訳御座いません」

「……ちよっと、待ってくださいね」

魔王はお腹が痛くて、魔力回復どころではない。

しかし魔力が回復しないと私は帰れない。

つまり魔王のお腹が治らないと私は帰れない。

「あの、腹痛の原因とかがって分かってるんですか？」

「それが、ここ数ヶ月は先ほどの者たち及び関連国との戦争が続いていたため……」

放置してたのか。

「ではこれから治しましょう、しっかり加療しましょう」

私がそう言うと、長椅子で横たわっていた魔王が口を開いた。

「ようやく終戦し、国の復興に魔王不在では……」

そしてじっと私の目を見つめる魔王。

何を期待しているのか言われなくとも分かるが、それはとても嫌だ。

しかし、魔王が回復しなければ私の帰還方法は絶たれたも同然。

「あの、提案なのですが……このまま魔王代理を続行していただけないでしょうか？陛下が回復するまで」

宰相が言った。

魔王が口には出さず私に伝えようとしている言葉を宰相が言った。

「……」

「幸い、マントの委譲は出来ていますし、マントもしっかり機能しましたし」

「いやあの……」

「陛下、どうですか？長期の療養にてしっかり治していただきたいのですが」

「そうだな、私もこの痛みから早く解放されたい」

「ではさっそく各国に通達せねばなりませんね。しかし終戦後なのであまり仰々しい戴冠式は控えたほうが宜しいですね」

ちょっとまで、うん。ちょっと待って。

私はまだ了承してないが、その前に。

「あの、通達？何のです？」

「何って、あなたの魔王就任ですよ」

「え？代理ですよ？」

「代理は代理ですが、世界にそれは通用いたしません。この国で魔王不在はあってはならない事です。表向きはあなたには魔王陛下となつて頂きます。そして、陛下が完全に回復した暁にはそのマントとともに魔王の称号を陛下に委譲、そしてお帰りして頂きます」

「あの、私は何もできませんよ？」

「ご心配には及びません……、それはそうと大変今更なので恐縮ですが、お名前をお伺いしても宜しいでしょうか？」

そういえば名乗ってなかった。

「すみませんこちらこそ。私は……、あの、この世界で家名は先に名乗るのですか？後に名乗るのですか？」

「後です」

「では改めまして、私はリコ・アサギです」

この日を境に、魔王代理の日々が開始されることとなった。

3 話目

その後、魔王陛下は風のごとく颯爽と荷を纏めて療養地へと旅立った。

帰る1週間前に連絡を入れると言って、私に小箱を授けて出て行った。

魔王陛下が部屋から出ていき、宰相に声をかける。

「何か貰ったんですけど」

先ほどの戦闘で荒らされまくった部屋を片付けていた宰相はその手を止めて答えてくれた。

「その中に、魔王陛下の印章が入ってます。ちなみにそれも魔王陛下しか触れることができません」

ということとは、……重要書類とかそういうのに私がこの判子でポンするのか。

小箱の中の四角い印鑑を見ながら、思う。

魔王陛下の仕事ってなんだ？

「あの、私の仕事ってどんなことですか？」

そうですねえ、と宰相は少し停止して何かを考え始め、しばらくすると指を一本ずつ折り曲げながら何かを数えだした。

その指が両手に及び出したのをみて静止をかけた。

「追々、追々ぼちぼち教えてください」

「そうですね、改めて文章化して提出いたします」

文章化するほどの量か…。

私も部屋の片づけを手伝う。

「この国って人間と敵対してるんですか？」

「ええ、といってもこちらから国を挙げて手を出すことは無いのですが。どういうわけか、人間の国のほうで打倒魔王を掲げ定期的に攻めてくるのですよ」

「えー…。…じゃあまた攻めてくるってことですか？」

「そうです。しかし今回の戦争で、我が国も多大な被害を受けましたが同じくらい相手の国にも被害を出したので当分は攻撃を仕掛けてこないでしょう」

「おっ！そうなんですか？」

私が代理としている間に戦争とか、絶対無理だ。無いに越したことは無い。

「ええ、我が国の戦力の半分以上を出撃させましたので向こうの復興も時間と金が必要になるでしょう。そしてある程度安定しても次

の布石も用意しておりますゆえ当分の間国同士の戦争は起きません」

「なんと頼もしいセリフ」

「ふふふ、恐れ入ります」

不敵な笑みをする宰相、手に箒と塵取りさえ持つていなければ格好がついていたのに。

「ちなみに布石とは？」

「ある程度、向こうの国が安定したところを見計らって王族内でのクーデターが起こるように何人か忍び込ませております。理想としては誰が味方で誰が敵か判別つかないくらい泥沼化するのを期待しております」

宰相は思いのほか鬼だった。敵には回したくない。

「そうそう、あと数日すれば戦地へ赴いていた三貴族が帰ってきてます。三貴族とは、この国の領地をそれぞれ管轄している者たちのことです。彼らが戻り準備ができ次第顔合わせをしていただきます。そうそう、くれぐれも代理であることは伏せておくようお願いします」

「……伏せておくんですか？」

「ええ、無駄に混乱を来すだけです」

「はあ。ところで戦地からいきなり帰って魔王変わってたらビックリしませんか？その方たち」

「大丈夫です。魔王交代は前魔王による指名制ですので急に変わっても不審がられることはありません」

「へえ」

「ただし、彼らは、絶対次に指名されるのは自分だと思っている節がありましたのでこの誰とも知れないあなたに色々と問い詰めるやもしれません」

「えー」

すこぶる嫌な声が出た。

「まあ、あなたの容姿ならば納得して頂けるでしょう」

「どついうことですか？」

私の容姿？ いたって普通だが。

「この世界において、黒を持って生まれることは無いに等しいのです。しかしそのマント、魔王の証の色にも採用されているように黒は最高貴の色です」

「……………なんてベタな展開」

小さく私はつぶやいた。

「その色をあなたは持っているのです。大丈夫、印章もマントもあなたの手の内にあります。堂々と顔合わせいたしましょう」

「でも、ひとつ問題がありますよ?」

「何がでしょうか?」

「……私、人間なんですけど」

「何をおっしゃいますかと思えば、そんなこと」

「問題ないんですか?」

「そもそも人間は黒を持って生まれてきません」

「……………」

「その色を持つことは無いのです。先ほど黒は最高貴な色だとお伝えしましたが、全世界共通というわけではございません。その色はこの国においてとい前置きが付きます。他国、もとい人間の国では不吉の象徴あるいは畏怖すべきものと思われております」

「じゃあ、私はこの世界に呼ばれた時点で人間側には属せないというオプションがついていたということか。」

「だからあなた以外魔王代理は務まりません。自信を持って魔族の一員だと名乗ってくださいって支障は全くございません」

「ぎゅっとぞうきんを絞りながら宰相は言い切った。その手にぞうきんが無ければ格好がついていたのに。」

大分片付きつつあるこの部屋。

換気のため窓を開けると、そこから外の様子を見ることができた。

「宰相さん」

「いかがされましたか？」

私が眺めている窓へと宰相は近づき、外を眺めた。

「相手国の復興にはお金と時間がかかると言っていましたよね？」

「ええ」

「この国も大概、時間とお金が必要ですね」

「ええ、あの勇者一行は中々の暴れん坊でしたからね」

城下に広がるは言葉も出ないほどの崩壊っぷり。

「さて、部屋もある程度片付きましたのでこれからの予定について話しましょう」

宰相の言葉により窓の外に向けていた視線を、部屋の中心に用意されていた簡易机と椅子へ移動させた。

宰相がせつせとその机の上に色々と資料を広げて準備をしている。

その大量の資料と城下の現状を見て、一日でも早く魔王が復活することを切望した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3222y/>

私は何もできません

2011年11月10日02時19分発行